

被災地の肖像

「仮設きずな新聞」編集長

岩元 暁子

震災から間もなく五年。

仮設住宅で暮らす人々に寄り添いながら
続いてきた小さな新聞がある。

編集長を務める一人の女性に迫った。

文 三川口 曜

写真 レビースポーツ奥書ボランティアセンター



新聞を媒介に、「活かし、活かされる」

最も多いときで七一〇二世帯が暮らしていた宮城県石巻市の仮設住宅団地。復興公営住宅などへの移転が進み、その数は月を追って少なくなっている

が、現在でも約四二〇〇世帯・九〇〇〇人近い人々がその仮住まいで日々の生活を送る。

そんな仮設住宅に月二回届けられる、A4判四ページの小さな新聞がある。「仮設きずな新聞」

だ。地域のイベントや寒さ対策といった生活情報を中心に身近な話題が掲載されるその新聞は、発行元であるピースポーツ

災害ボランティアセンター（PBV）のスタッフや全国各地から訪れるボランティア、地元の協力者らの手によって原則全戸に手渡しされる。



仮設きずな新聞

編集長を務めるのは岩元暁子さん、三十三歳。台割を決め、自らも取材して記事を書き、編集部員が寄せる記事を手直ししてレイアウトするのが彼女の仕事だ。そして、配布を統括するスタッフやボランティアと

ともに新聞配布にも出かけている。手渡しにこだわるのは、新聞が仮設住宅に住む人々の情報源となるだけではなく、「新聞を媒介に生まれる人と人との関わりをたいせつにしたい」からだという。二〇一五年八月、それを象徴する話を聞いた。「新聞や、それを届けに来てくれる岩元さんらとの交流が心のよりどころになりました」

新聞の一〇〇号を祝う式典で、市内の仮設波川河川団地に妻（七五歳）と暮らす阿部泰蔵さん（七八歳）はそう挨拶した。震災で、阿部さんは長女（当時四六歳）と

小学四年生だった孫娘を亡くした。行き場のない悲しみで絶望の淵にいますとき、岩元さんに出会ったという。新聞を通して復興への歩みとそれに関わる人々について知り、新聞をつくる彼女とも話をするので、少しずつ前を向けるようになったと振り返る。

一方の岩元さん。

「話を聞いても何かをしてあげられるわけでもありません。それでも、新聞を書き、そう言ってもらえることで。誰かの役に立っている。」と実感でき、日々のエネルギーになっていきます。そもそも、支援する側とされる側の境目はあつてないようなものなのでは、と感じます。人との関わりの中で、活かし活かされているんだと思います」

「心で出会う」という体験

岩元さんが初めて石巻にきたのは二〇一一年四月二三日、震災から四三日後だった。市街地の南側に盛り上がる丘陵・日和山ひよりやまでは、満開の桜が花東はなあずまとなつて揺れていた。山上から一望できる南浜・門脇地区は津波とそれに伴う火災で全壊・全焼し、見渡す限り瓦礫の山である。黒焦げの鉄筋や車が折り重なる中に、トラック一台がやっと通



2011年5月 活動初期の岩元さん（左手前）

れるような仮の道が延びていた。桜と瓦礫。その悲しい色彩が、彼女の心に残る最初の石巻だ。

当初の予定は一週間のボランティア活動だった。だが、五日目の朝に延長者が募られたとき、岩元さんは迷いなく手を挙げた。「最初は一週間も活動すれば充分、と思っていたんです。毎日必死で泥掻きをして、朝は筋肉痛で起き上がるのも一苦勞。体を

動かした分、目の前の小さな空間はきれいになりました。でも、街全体を見れば初日と同じ景色だったんです」

これは途方もない時間がかかる。作業の勝手もわかってきた。だったら、もう少し活動を続けてみよう。そう思ったという。

それから四年一〇カ月。避難所、市街地、浜、工場、仮設住宅と刻々と変化する状況やニーズに合わせて活動の場は変わったが、



2011年5月の石巻市門脇地区

岩元さんは今も石巻で暮らす。一二年四月には、それまでボランティアとして活動していたPBVの職員となり、住民票も石巻に移している。

そんな岩元さんが石巻で活動を続ける大きなきっかけになったと語るのが、老舗かまほこ工場「高橋徳治商店」社長の高橋英雄さん（六五歳）との出会いだ。

一一年秋、岩元さんはボランティアリーダーとして高橋徳治商店の再建を手伝うことになる。ヘドロやうじ虫、冷蔵倉庫から流れてきた魚の死骸と格闘しながら機械を掘り起こし、洗浄する毎日。そんな状況の中でも、英雄さんは社員とその家族

の生活を背負い、全国の取引先からの応援に応えるべく走り続けていた。

だが、ある日。英雄さんは思いつめたような表情で言った。

「先のことを考えると不安で何も見えな

い。震災後、自殺してしまった友人がいる。自分もすべて投げ出して死んでしまったほうが楽なんじゃないだろうか」

一ボランティアにも社員たちにも、普段は決して見せない姿。岩元さんは彼が自殺



阿部泰蔵さん夫妻宅で談笑する岩元さん

する夢を見るほどに心配した。心に重くのしかかる体験だが、岩元さんはこれを「ボランティアと被災者」という壁を越え、初めて心で石巻の人と出会った瞬間だったと振り返る。

支援する側とされる側という垣根を越えた心の出会いが、それ以降も彼女の活動の支えになった。

住民との「きずな」が支えた手紙

新聞配布中、仮設住宅の玄関先で

仮設きずな新聞は二〇一一年一〇月創刊。仮設住宅での孤独死を防ぐ見守り活動の際に持参し、身近な情報を届けようとスタートした。岩元さんは一一年一二月から新聞の担当となり、七月に編集長を引き継いだ。忘れられない思い出がある。編集長に就く前、新聞づくりにも携わるようになってすぐの一二年三月。岩元さんは三月一日に市内各所で行われる追悼行事の情報をまとめ、記事にした。

団体内では「仮設で暮らす人に、震災を無理やり思い出させてしまう」と反対論も根強かったが、岩元さんには「一年目の三・一一をどうやって過ごせばいいのかわからず、追い詰められている人が少なくない」

という実感があった。

迎えた三月一日。避難所になっていた小学校での追悼行事に、仮設きずな新聞を手にした女性の姿があった。

「この新聞で追悼法要があると知って……。同じ避難所にいた人たちと、一緒に祈れるかなと思って」

新聞は、過去を伝え未来を見せる。そして未来を変えることができるのだと、このとき実感したという。

編集長を引き継いだ岩元さんは次々と新しい取材企画を考案する。被災店舗の「再開物語」は、郊外に多い仮設住宅と旧来からの街中をつなこうという思いからだ。石巻への移住を決めた元ボランティアを取材した「石巻方チ市民」は、彼らの存在に勇気づけられたという住民の声をきっかけにスタートした。仮設住宅に閉じこもりがちの人が多くなか、一歩外に出るきっかけになればと、趣味のサークルを紹介する特集も複数回にわたり連載した。

だが、すべてが順風満帆だったわけではない。

一三年三月には、資金面の問題から一旦休刊している。「私の力不足で新聞が終わ

ってしまおう」と、新聞配布に出かけるのがつらかった。ストレスと過労で倒れ、病院に運ばれたこともある。

だが、住民の声が支えになった。「身近なニュースが力になる」「貴重な情報源」「読むだけで元気になれる」……。アンケートでは八割以上の住民が継続を望んだ。

米系慈善団体などの助成を受け、三カ月後に復刊。今では石巻で活動するほかのNPOなどにも編集部に加わってもらい、配

布には仮設住宅で暮らす住民も参加するようになった。

無料の、しかも黙っていても届けられる情報紙でありながらこれほど支持されるのはなぜだろう。岩元さんに新聞づくりの極意を聞いて、その答えが見えた気がした。「顔の見える新聞であることを常に考えています。住民さんに私たちのことを知ってもらおうのはもちろん、私も読者の顔を見たい。記事を書くときは住民さんの顔を思い浮かべます。この記事は〇〇さんが興味を持ってくれそうだな。これを読んで、〇〇さんが足を運んでみてくれたらいいな。そんな風に」

そう聞いて思った。仮設きずな新聞は、岩元さんから仮設住宅に暮らす人々への手紙。彼女は仮住まいで暮らすあらゆる人に、思いのたけを込めた手紙を書いているのだ。**受け取ったのは心**

二〇一五年一二月、暮れの押し迫ったある日。この年最後の新聞を配る岩元さんと同行した。出かけたのは、河南地区にある仮設役場前団地。一軒一軒呼び鈴を押し、「仮設きずな新聞お届けに来ました！」と



100号記念パーティで住民さんと

大きな声をかける。

あるお宅で、家のなかに招かれた。お茶と漬物、煮付け料理などが次々に出される。「風邪は治ったのか?」「ちゃんと栄養つけなきゃ」。久々に実家へ戻った娘を迎える両親のように見えた。

「新聞を読んでつとね、本当にあきちゃん頑張ってるのが伝わってくつから。こっちも応援したくなるんだ」

思いのたけをこめた手紙を届け、岩元さんがかわりに受け取ったのは「心」。

「五年も石巻に在ると言うと、美しい自己犠牲の物語を想像する人が多いけれど、そんなことないんです。住民さんたちの温かい応援があるから私は石巻に在るんです。それに……」

少し間をおいて、岩元さんは続けた。

「人を応援するって、応援される以上に元気が出ると思うんです。私を応援することで少し元気になった住民さんを見るのも嬉しくて」

そこに、「支援する人と被災者」という図式はない。一枚の新聞を通して、岩元さんと仮設住宅の人々は活かし、活かされていくのだ。

岩元さんのこれまでの活動

2015年		2014年	2013年		2012年		2011年				
九月	八月	六月	六月	三月	八月	七月	八月	七月	六月	四月	
仮設きずな新聞が創刊一〇〇号に。記念式典を開催 黒怒川決壊による茨城県常総市での緊急支援に参加。編集長の任を継ぎながら緊急支援ニーズとシズ（支援の申し出）のマッチング作業を担当		編集部メンバーと神戸へ研修旅行。被災地でこれら起こり得る問題を学び、新聞で連載	仮設きずな新聞復刊。「心のケア」や「街づくり」など、石巻で活動する専門性を持った他団体も編集部に加わる		資金難などから仮設きずな新聞が休刊 仮設きずな新聞復刊。二代目編集長に就任。さまざまな新規取材企画をスタートする		石巻への来訪者を増やす取組 「ピシタース仮設ネットワーク」の一員として石巻の魅力発信に携わる	石巻川開き祭りの準備を担当 街づくりチームのボランティアリーダーとして工場の再開支援を担当する。かまぼこ工場「高橋徳右商店」や缶詰工場「木の屋石巻水産」などの再建をサポート。雄勝石を使ったネックレスなど既製品の作成指導と販売を支援 工場支援終了。仮設きずな新聞の担当に			
									漁業支援（浜に打ち上げられた瓦礫清掃。鮭の稚魚の養殖プール清掃など）を担当 その後、避難所担当のボランティアリーダーに。物資倉庫の整理、食糧庫の管理、お風呂の受付などの調整を行なう		

いわもとあきこ



一九八三年、横浜市生まれ。上智大学文学部卒業後、米系IT企業の営業職として四年半勤務。東日本大震災発生一カ月後に石巻入りし、一年間のボランティア活動ののち、ピシタースポーツ災害ボランティアセンターの職員となった。
 二〇一一年一月から仮設きずな新聞の担当となり、七月に二代目編集長に就任。